# 論　文　要　旨

**幼児期の絵本の読み聞かせ場面における大人の関わりに関する研究**

人間発達科学専攻　　齋藤　有

本論文では，幼児期において日常的な養育場面である絵本の読み聞かせを取り上げ，3 つの観察研究および 1 つの実験研究から，母子相互作用の「実態」や幼児期の子どもの学びの「過程」を実証し，幼児期の学びにつながると考えられる大人の関わりを明らかにすることを試みた。

【研究 1】では，幼児期後期の母子 29 組を対象に横断的な観察調査を行った。この時，幼児の語彙発達との関連が明らかにされている母親の養育態度の 2 つの側面を指標として相対的な群分けを行い，読み聞かせ場面での母子相互作用の群間比較を行った。主要な分析として，使用した絵本材の特性から得られた，子どもの絵本内容に対する自発的な驚きや疑問に対し，母親がどのように反応しているのかを分類した。結果，子どもとのふれあいを重視する養育の側面である「共有型」的特性をより強くもつ母親では，子どもの驚きや疑問に対して「共感的で，子ども自身に考える余地のある」反応が多い一方，子どもに指示的に関わる養育の側面である「強制型」的特性をより強くもつ母親では「答え明示的で，子どもに考える余地のない」反応が多いという傾向が明らかになった。

続く【研究 2】では，12 組の母子を対象に，【研究 1】同様，養育態度による相対的な群分けをした上で，読み聞かせ中の母子相互作用の質的な違いが指摘されている幼児期初期と幼児期後期 2 時点の縦断的な観察調査を行った。結果，養育態度に関わらず，語彙獲得期にあたる幼児期初期に，母親は積極的に絵の説明をしたり，子どもの言語反応を引き出そうと質問したりして，読み聞かせ中の相互作用を主導することが明らかになった。しかし，子どもの言語能力，認知能力が向上し，興味関心も多様化すると考えられる幼児期後期になると，養育態度に関わらず相互作用の主導権が子どもに移る一方で，子どもの絵本への関わりに対する母親の反応に養育態度による違いが顕著に見られることが明らかになった。すなわち，「共有型」的特性をより強くもつ母親では，子どもの絵本行動に対して幼児期初期よりも共感的に反応することが増えるのに対し，「強制型」的特性をより強くもつ母親では少なくなるという交互作用が見られた。

そこで【研究 3】では，絵本の読み聞かせ場面における母親の共感的な関わりが子どもの学びにつながる過程を示唆するため，母親の関わりと，幼児の学びにとって重要とされる絵本への自発的な関わりの生起との因果的関連について検証を行った。すなわち，幼児期後期の 12 組の母子を対象に同一絵本の繰り返しの読み聞かせ場面の観察調査を行い，子どもが読み聞かせの回をまたいで繰り返し自発的に関わる箇所に着目し，その初回において母親がどのように反応しているのかを分類した。結果として，自らの絵本への関わりに対して最初に母親から答えを明示されたり，反応を得られなかったりする箇所よりも，共感

的で，考える余地のある反応を得られた箇所で繰り返し子どもは自発的に関わろうとしていることが明らかになった。事例では，子どもが初回に疑問に思ったことに対する答えを読み聞かせ中に自分で見つけ，2 回目の読み聞かせ時に得意げに母親に話す様子も観察された。

【研究 1】【研究 2】【研究 3】では絵本の中に書かれた文章を読むという朗読外の相互作用に着目して，子どもの学びにつながる大人の関わりについて検討したが，幼児期後期になると朗読外の相互作用が少なくなり，朗読が読み聞かせ場面において中心的活動になっていたことから，【研究 4】では，年長児 54 名を対象に，朗読それ自体の質が幼児の学びに与える影響を実験的に検証した。特に，音声の明瞭さでなく，抑揚があり，感情がこもっているかどうかという情緒的な質のみを操作し，子どもの物語理解の程度がどう異なるかを分析した。結果，物語内で生じる出来事の理解は朗読の質に関わらず十分に理解できる一方，抑揚があり，感情のこもった情緒的朗読では，抑揚なく，感情のこもらない非情緒的朗読よりも，朗読文中に明示された心情に関する理解が促されることが明らかになった。自由再生データの分析より，情緒的朗読のもとで，子どもは朗読文中に示された物語の登場人物の心情に対して自発的に言及していることが明らかになった。幼児期後半には，朗読外の言語的相互作用がなくても，情緒的な朗読によって子どものことばへの敏感性が高まり，物語の理解が促されると示唆された。

以上，4 つの研究から，絵本の読み聞かせ場面における母子相互作用の「実態」や子どもの学びの「過程」がどのようなものであるかを実証的に明らかにすることを通し，幼児期の子どもの学びの「過程」につながる大人の関わりとして，第 1 に，子どもの興味関心を支持し，子どもが自発的に関わって学ぶことを援助する側面，第 2 に，韻律の豊かなことばかけによって，子どものことばへの敏感性を高め，学びの手がかりを与えるという側面が考えられた。